

天理参考館 ニューズレター

天理大学附属天理参考館

発行日：2008. 3. 18

発行：天理大学附属天理参考館

編集：広報普及

第57回企画展

古代ギリシア美術への誘い

会期 / 4月9日(水)～6月9日(月)

世界最大の内海である地中海の東部、エーゲ海周辺地域でギリシア美術は生まれました。地中海性気候に属するエーゲ海周辺地域では、秋から冬にかけては雨期が、春から夏にかけては乾期が訪れます。冷たい雨が降り続ける鬱々とした雨期が明けると、紺碧の美しい空と海、生い茂る草木の緑のカーペットが大地に広がります。古代ギリシア人の思想や美術はこのような自然環境の中で育まれていきました。また、乾期には湖のように穏やかなエーゲ海の上で、船を操ることさえできれば、遠方への往来は大陸を横断するより容易です。海を介した遠方との接触が古代ギリシア人のあらゆる営みに



赤絵式パテラ イタリア
前340-330年頃 高16.2cm 径35.2cm



青銅製兜 ギリシア
前6-5世紀頃 高26.7cm

影響したことは確かです。

異文化である古代ギリシア美術が私たち日本人にも魅力的に映るのは、人々の憂いと喜びの精神の両面が切実に表現されているからかもしれません。あるいは、神話の世界で共に生きた神々への信仰が、私たち日本人の八百万の神々への信仰とどこか似ているからかもしれません。

本展では当館が収蔵する先史時代からヘレニズム時代までの資料を中心に、古代ギリシア美術を紹介いたします。先史時代はキュクラデス、ミノア、ミケーネ文化の土器や金属器などを、続く幾何学様式時代からヘレニズム時代までは、黒絵式・赤絵式陶器やテラコッタ像、装飾品などを展示いたします。これらの展示資料から古代ギリシア美術の流れを追うとともに、古代ギリシア人の精神世界を探ってみたいと思います。二千年以上経てもなお、私たちの心を捉え続ける彼らの美術をこの機会にじっくりご鑑賞いただける幸いです。

列品解説

日時 / 4月25日(金)・5月26日(月)

いずれも午後1時30分

会場 / 当館 3階企画展示室

担当 / 飯降美子(当館学芸員)

今回の企画展開催に併せて4月から6月のトーク・サンコーカンでは『東地中海の遺跡をめぐる』シリーズ(全3回)を開催します。詳細は本誌4頁に掲載。



赤絵式渦形クラテル イタリア
前4世紀頃 高48.0cm

お知らせ 「国際博物館の日」

毎年5月18日を「国際博物館の日」と定め、地域住民の幅広い参加を得て、博物館の存在理由を全世界の博物館とともに、それぞれの地域社会にアピールする機会として開催されています。

当館は、この趣旨に賛同し、5月18日を含む左記期間にご来館されました方に、記念品を配布する予定です。

◇期間 / 5月12日(月)～18日(日)

企画 第58回企画展 幕末明治の銅版画

— 上方のモノトーン風景 —

会期 / 7月9日(水) ~ 9月15日(月)

館蔵品の中から幕末明治期の観光土産品といえる小さな銅版画をご覧頂きます。その多くは畿内いわゆる上方の名所旧跡を描いた絵葉書ほどの大きさの微細な表現の素朴な版画です。

天明3 / 1783年、江戸の司馬江漢(延享4 / 1747 ~ 文政元 / 1818)に始まる日本の腐蝕銅版画(エッチングなど)が化政期以降頃から京都や名古屋でも開花し、蘭方医学書(文化3 / 1806刊など)に銅版挿絵が出現しました。また、京都の井上九阜(生没年不詳)と中伊三郎(？ ~ 万延元 / 1860。作画期 II 文政 ~ 天保6 ~ 7 / 1835 ~ 6頃)は作例は少ないものの、ことに中伊三郎は細密微少な銅版画の先鞭をつけ、中川信輔(大阪の人。生没年不詳)や江島鴻山などを育てます。

次いで玄心堂杏山(大阪の人)、梅川夏(北京都の人。寛政11 / 1799 ~ 弘化4 / 1847)、そして初代玄々堂(松本保居(京都の人。天明6 / 1786 ~ 慶応3 / 1867)らが登場します。松本保居は文政(1818 ~ 29)末期から天保(1830



〔五條籬嵐霜夜〕 轟 しょうまがきしまそうや 松本保居 7.2cm x 12.8cm

43) 初頭頃に銅版画を始め、弘化(1844 ~ 48)年間末頃まで京都の寺社を中心とした、名所や地図、洋画風の小品など、多種多様な土産品の銅版画を制作し、上方に銅版印刷を根付かせました。

長男の松田緑山(二代玄々堂。天保8 / 1837 ~ 明治36 / 1903)は嘉永 ~ 元治期(1848 ~ 1865)に作画します。幕末明治維新という時代にあつて、近代的な印刷業の経営を進め、明治36 / 1903年に没するまで銅・石版印刷の普及や松田龍山、若林長英、中村文山、森琴石、石田有年、石田旭山など数多の門弟を育成しました。また、嘉永 ~ 文久(1843 ~ 63)年間に300点を超える銅版画を残した松本保居の弟子、岡田春燈齋(京都の人。生没年不詳)は、明晰かつ力強い線描表現と、愛くるしい表情の人物描写が、印象的です。

観光資源の豊かな上方で開花した銅版の土産絵は、次第に絵葉書などにその座を譲ることになります。色鮮やかな錦絵版画の陰に隠れ、忘れられたかにみえる、幕末明治の銅版画ですが、近代以降の関西印刷業の隆盛を準備した存在としても、再認識する機会にしたいだければ幸いです。

列品解説

日時 / 7月25日(金)・8月26日(火)・9月12日(金)

会場 / 当館 3階企画展示室

担当 / 中谷哲二(当館学芸員)

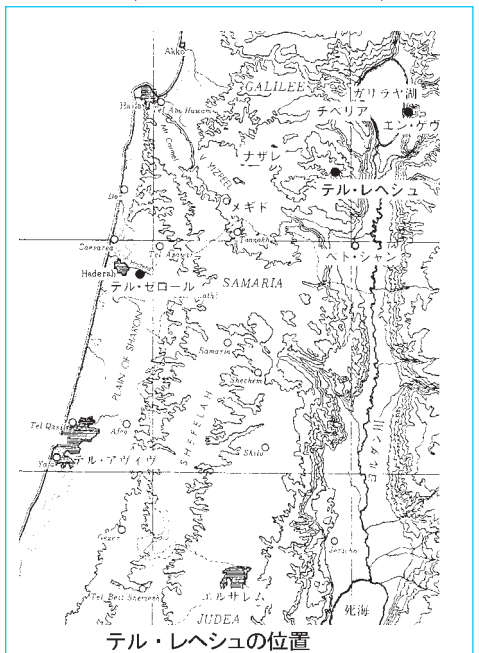
発掘調査 イスラエルにおける テル・レヘシュ遺跡(1)

イスラエルの調査と天理とのかわりについては、ニュースレター第1号でそのあらましが述べられていますが、今回は調査が継続中のテル・レヘシュ遺跡について、少し詳しく説明したいと思えます。

地中海東岸に位置するイスラエルは日本の四国ほどの大きさの国で、東部でシリア、ヨルダンと国境を接しています。その国境沿いをヨルダン川が北から南に流れていますが、その北部にガリラヤ湖が、南には海面下400mと、世界でも低いところに位置する死海がありま

す。このガリラヤ湖と地中海に挟まれた東西50km程の地域がガリラヤと呼ばれる地域です。北はレバノン山に、南はエズレル平野で画されていて、北部の山がちな上ガリラヤと南の平坦な下ガリラヤに分かれます。テル・レヘシュ遺跡はこの下ガリラヤの遺跡で、ガリラヤ湖の南西部に位置します。

ところで、旧約聖書などによれば、イスラエル王国は紀元前11世紀に成立しますが、紀元前13世紀 ~ 紀元前12世紀頃には部族連合としてのイスラエルが形作られていたようです。旧約聖書の「ヨシヤア



テル・レヘシュの位置

記」には下ガリラヤにイッサカルと呼ばれる部族の領域があったことが記されています。そこにはいくつかの町の名がみられますが、その一つにアナハラトがあります。この町は、紀元前15世紀のエジプトの王、トトメス三世の遠征記にもあらわれていて、古くから重要な町であったことがわかります。実は近年、テル・レヘシュがこのアナハラトではないかとする説が有力になってきました。

テル・レヘシュ遺跡はこれまで、何人かの研究者によって踏査がおこなわれ、遺跡の成立や変遷についての推測がなされてきましたが、発掘調査は実施されたことがなく、遺跡の具体的な様相はわかっていませんでした。2006年春に日本隊によって初めて鍬が入られた遺跡なのです。

今回は遺跡の様子などについて詳しく見ていきたいと思います。(日野)

周辺の見所
石上神宮

天理参考館の東の森に、奈良時代以前から神宮称を名乗る石上神宮が鎮座しています。鎌倉時代の楼門(重文)をくぐる、平安時代の優美な松皮葺の拝殿(国宝)があり、後方に禁足地が広がっています。主祭神は布都御魂と布留御魂、布都斯御魂です。この神社には日本書紀神功皇后五十二年条に百済王から倭王にもたらされたとされる七枝刀(国宝)が伝わっています。刀身の左右に三本ずつ枝がのび、表と裏に金象嵌の銘文が刻まれています。「泰和四年」(369)の紀年銘があることから、中国東晋時代に製作されたと考えられます。この他にも、鉄製盾(重文)・禁足地出土品(重文)・出雲建雄神社拝殿(国宝)など、たくさん文化財が守り伝えられています。(竹谷)



石上神宮の拝殿

資料紹介

居酒屋の看板
「酒飯舗幌子」



中国(北京市) 1940年収集
長 70.0cm

かつて中国大陸で使用されていた商店看板には二つの種類がありました。一つは現在も見かける商品名や店名が書かれた看板、もう一つはほとんど文字を用いない看板(北京では幌子と呼称)です。

幌子の形状は、販売品をそのまま吊り下げたものであったり、一種の謎かけになっていたりして、時には何を扱う商店なのかさえ分からないものもあります。しかし、現在は一部の地方を除き、その姿を見ることがなくなりました。当館はこの幌子資料を約130点収蔵しています(うち46点は常設展示中)。

写真は簡単な料理も出す居酒屋(中国語では酒飯舗)の幌子です。下部の黒い垂れ幕には白布が縫いつけてあり、表面に「天子呼來不上船(天子呼び来たれど船上らず)、裏面には「自稱臣是酒中仙(自ら称す、臣は是れ酒中の仙)」と書かれています。これは唐代の詩人・杜甫が、同時代の詩人・李白について詠んだ『飲中八仙歌』に見える詩句です。内容は、唐の玄宗皇帝が船遊びの際、共に詩を作ろうとして李白を召したが、彼は泥酔して船に登らず「私は酒浸りの、世事にかまわぬ人間です」と自称したエピソードを示しています。李白は無類の酒好きとして知られていたため、この詩がそのまま居酒屋の看板になったと思われる。(中尾)

資料紹介

三彩連銭馬



中国・唐代(7世紀末~8世紀)
高62cm

天理参考館でお馴染みの馬を紹介しましょう。この馬は、入館券をこれ一体で飾っているのですから、天理参考館の「一押し」なのです。実際、遠目に見て美しく、近くに寄れば馬具の細かな細工に目を見はる、まさに名品です。

この馬は唐三彩という技法で作られています。唐三彩はご存知のように緑や褐色などの釉薬(うわくすり)できらびやかに飾った焼きものです。ただしこの馬は、さらに複雑な作り方をしています。というのも、釉薬で色を表現するのは鞍やベルトなどの馬具の部分だけであって、馬の体の部分は、焼成前にセピア色の土を全面に塗ってから白い土で円模様を描き、それを無色透明の釉薬で覆うという技法で作っているのです。この馬が一般的な唐三彩の馬に比べてより引き締まった名馬に見えるのは、このような手の込んだ技法によるのでしょう。

今度ご覧になるときは、ぐつと近づいて、釉薬の下にバックされた1300年前の筆遣いにも目をやって下さい。(小田木)

発掘調査

石上良因寺跡の発掘

1973年3月から4月にかけて、建物建設に伴う事前の発掘調査を行いました。調査地は布留川を挟んだ石上神宮の北にあたります。

調査の結果、庇付掘立柱建物と礎石建物、南北方向に延びる築地塀の跡が見つかりました。

調査地一帯は石上神宮の神宮寺として石上寺が建てられ、後に良因寺と呼ばれたお寺の跡です。調査では9~10世紀の緑釉陶器や獣足付盤などが出土していることから、検出された遺構群は、良因寺に関わる建物と考えられます。

良因寺がいつ頃建てられたのか定かではありませんが、9世紀の後半には存在したことが文献から分かります。その盛期には、寺領一町二反六〇歩(約四千坪)もあつたとされ、今でも付近には西塔、堂ノ前、堂垣内、堂ノ後などお寺にまつわる小字名が残っています。

この良因寺を建立したのは、平安時代前期の歌人で六歌仙のひとり、僧正遍昭といわれています。遍昭は、桓武天皇の孫で、後に出家して良因寺の僧となりました。『後撰和歌集』(10世紀)には、遍昭のもとを訪ねて来た小野小町が一夜の宿を乞い、遍昭と交わした贈答歌が収められています。

現在、良因寺跡の一郭には厳島神社の社殿があり、その横には、遍昭が良因寺の守護堂として建てた薬師堂(明治期以降の再建)が残っています。(高野)



公開講演会 トーク・サンコーカン

広く一般の方々には当館をさらに身近な施設として利用していただき、諸文化の理解と教養を深めていただくことを目的とする公開講演会です。講演は、いずれも午後1時30分受付は午後1時から当館研修室にて。受講無料(入館料が必要)。

『東地中海の遺跡をめぐる』(全3回)

地中海といえば何をイメージされますか。青い空と海、赤い屋根と白い壁、それとも高級リゾートでしょうか。東地中海には、たくさんさんの遺跡があることでもよく知られていますが、有名な遺跡は観光地となつていますが、ここでは観光客もその歴史的重要性を良く理解し、保存に配慮している姿を目にします。また、日本ではあまり知られていない「掘り出し物」の遺跡もあります。

今回は実際に現地へ赴いた学芸員が、その時撮った写真をお見せし、その時々を感じたことを交えながら遺跡を紹介します。この機会に、古代地中海文明のロマンに浸ってみませんか。

第182回 『東地中海の遺跡をめぐる』シリーズ 「古代ギリシアの遺跡と美術」

月日/4月26日(土)
講師/飯降美子(当館学芸員)

古代ギリシアの遺跡といえば、小高い丘の上に築かれたアクロポリス(要害)、その内外に建てられた美しい神殿、壮大な劇場など、誰もがすぐに思い浮かべるのでできる情景です。そしてそこで生まれたギリシア美術は、二千年以上を経た現代でも私たちの心を捉え続けてやみません。彼らの思いを視覚的

に伝える手段として、長い経験から生み出されたものでした。今回はアテネの遺跡とギリシア陶器を中心にお話したいと思います。

第183回 『東地中海の遺跡をめぐる』シリーズ 「キプロス 地中海をつなぐ島」

月日/5月24日(土)
講師/巽 善信(当館学芸員)

キプロスは青銅器時代に、豊富な銅鉱と地の利を生かし、一大銅生産センターとして繁栄します。エジプトやヒッタイトなどの粘土板文書でも、しばしば言及されている程です。大地震などの天災でキプロス経済は破綻しますが、しだいに商業を得意としたフェニキア人が都市をつくり、キプロスを拠点として地中海交易を一手に握るようになります。そのフェニキア都市と制海権を争ったのがローマです。ローマが地中海を制覇し繁栄の時期を迎えます。海上交易に焦点をあてて、キプロスの遺跡を紹介します。

第184回 『東地中海の遺跡をめぐる』シリーズ 「パレスチナにおける日本調査隊の軌跡」

月日/6月21日(土)
講師/日野 宏(当館学芸員)

エジプトとメソポタミアに挟まれた要衝の地パレスチナでは、古くからこの地を巡る多くの争いがありました。2006年、イスラエルのテル・レヘシユ遺跡で日本隊によるはじめての調査が始まりました。レヘシユはエジプト18王朝トトメス三世の遠征リストにでてくるアナハラトで、エジプトによって征服された町ではなかったかと推測されています。今回は、このレヘシユをはじめとして、これまでパレスチナの地で日本調査隊によって調査されたテル・ゼロール遺跡やエン・ゲヴ

遺跡について紹介したいと思います。

第185回

「不思議発見!脳を鍛える折紙ワールド」

月日/7月19日(土)
講師/幡鎌真理(当館学芸員)

折紙と聞いて何を連想されますか。鶴? 奴さん? 日本人にはなじみ深い遊びの一つにはちがいありません。

折紙は今では一般的に子どもものあそびですね。玩具や人形がまじないや祓いの具として作られていたものが、やがて子どものおもちゃになるというコースをたどったように、折紙も同じ道を通ったと考えられます。そして、なんといつても第二の脳といわれる指先をフル活動させる折紙は頭の活性に役立ちます。二次元の一枚の紙が、三次元の物体に変化する、折紙の不思議ワールドを実感していただきます。

第186回

「東大寺山古墳出土の腕輪形石製品」

月日/9月27日(土)
講師/高野政昭(当館学芸員)

天理市檉本町の東大寺山古墳から中平銘の大刀が発見されたことは有名ですが、副葬品の中には、多くの刀剣類のほかに、碧玉製の腕輪形石製品もたくさん出土しています。

碧玉製の腕輪形石製品は古墳時代の前期を代表する副葬品で、鍬形石・車輪石・石剣の3種類があり、弥生時代の貝製腕輪をモチーフにして誕生しました。

今回は、三角縁神獣鏡とともに古墳時代前期を代表する遺物である腕輪形石製品が、ヤマト政権の支配体制とどのように関わっていたのかを考えます。

利用案内

開館時間 午前9時30分～午後4時30分
(入館は午後4時まで)

休館日 毎週火曜(祝日の場合は翌日)
ただし毎月25日・27日、4月17日・19日、7月26日・8月4日は開館

創立記念日(4月28日)
夏期(8月13日～17日)

入館料 年末年始(12月27日～1月4日)
大人400円、団体(20名以上)300円
小・中学生200円

交通 電車/JR桜井線天理駅・近鉄天理線
天理駅下車 南東へ徒歩約30分

車/西名阪道天理I.C.から国道169号線
を南へ約3km 駐車場あり(無料)
その他 団体見学は事前にご連絡願います

世界の生活文化と考古美術の博物館

天理大学附属天理参考館

〒632-8540

奈良県天理市守目堂町250番地

Tel 0743-63-8414

Fax 0743-63-7721

URL <http://www.sankokan.jp/>

編集後記

天理参考館ニュースレター第4号を発行しました。平成20年度前半に開催します企画展「トーク・サンコーカン」を掲載しました。

収蔵資料の紹介や発掘の報告など、より親しみやすい内容を掲載していきます。次号も期待して下さい。(片山)